

## 提 言

### 1.人口減少に対応する小規模集落への包括的支援について

「山里に 笹ゆり 咲けど 人けなく 村は まぼろし 美わしき 鎮守の 森よ 祭り太鼓が うつつに ひびく 水も しずもれ すいめい湖……」この詩は、今は、糶屋ダム「翠明湖」の湖底に眠る”徳畑“から、移住を余儀なくされた竹内正企氏が、郷愁の念を込めて歌った”ふるさとに贈る歌“です。ふるさと創造大学第3回講座では、「糶屋ダム(翠明湖)の歴史～そこには2つの集落があった～」と題して、地域の社会資本(ダム)建設をめぐる激しい反対運動と合意形成のうちに、湖底に沈んだ「糶屋新田・徳畑の両村」に係わる歴史学習をしてきました。いわば外的な要因によって、かつて移住・離散に至った集落が存在したわけですが、ひるがえって、今日、少子高齢化という内的要因によって、「(準)限界集落化」する集落が町内に増加する傾向にあります。

現在では、町内62集落のうち、住民が100人以下という集落が6村、200人以下の集落が13村（令和2年1月分人口統計）という状況です。本町の人口ビジョン「人口推計結果総括表」に於いても、10年後の2030年には人口約18000人、2040年には、人口約16000人とされ、65歳以上人口はそれぞれ約41%、45%という推計結果が出ています。

20年後の多可町を考えると、人口減少・少子高齢化に伴い、現在の集落生活の形が崩れ、もしくは困難となり、一部集落の危機的集落化が必至といっても過言ではありません。心の拠り所・財産となる”ふるさと“を守るため、本町においても、危機感をもって人口減少社会に対応する総合的な施策が検討され、人口減少に負けない、高齢化の進展に合わせたまちづくりが展開されつつあります。

準限界集落：55歳以上が人口の50%以上
限界集落：65歳以上が人口の50%以上
危機的集落：65歳以上が人口の70%以上

それらに加え、小集落・限界集落問題を高齢者の生活問題として捉えるだけではなく、子どもや孫たちに続く世代に、今ある集落を如何に維持し、継承していくか(コミュニティ機能維持の可能性を探る)という観点に立って、3つの提言を致します。

### 1. 小規模集落同士の住民座談会(集会)の開催について

人口減少・少子高齢化の小規模集落が、今後直面していく課題は、生きていくための最低限度の生活条件（通院・食料品の買い出し・年金の引き出しなどができる交通や施設の整備など）の維持は勿論のこと、空き家、耕作放棄地、景観(周辺環境)、伝統的行事の継承など多岐にわたります。集落の将来図を考え、住民が誇りと自信と安心感を持って、生活していくために「小規模集落同士の住民座談会(集会)の開催」を提言します。次年度より、タウンミーティングも計画・実施される予定にありますが、同様の集落課題を抱える小規模集落同士が交流することで、共同体維持のための知恵、工夫、アイデアなどの情報交換が進み、新たな発想で将来像を考え、集落運営や活性化事業が展開されるかもしれません。

## 2. 新たな「集落連携・共助のかたち」を考える時が……

少子高齢化が急速に進む中、医療や介護のみならずいろいろな困りごとを解決するために、集落内で核になるリーダーを育成しよう！と地域互助活動向上住民研修会（コークゼミ）事業が昨年度からスタートしました。しかし、将来的に、人口減少が進む小規模集落においては、単独集落の互助組織に限界があり、隣村と互助扶助でつながるなど「集落連携・広域の互助活動組織」が必要と考えられています。いわば、小規模集落住民の暮らしの安心を支えるため、まさに、「向こう三軒両隣」から「向こう三集落両隣」への集落連携・集落間の共助が求められていると言えます。

将来に備えるため、すでに複数集落を担当し、広域活動をしている民生・児童委員や複数集落での合同消防活動の実践から、その課題を検証し、また、コークゼミや区長会との連携の中で、本町の実態に応じた現実的で、効果的な「小規模集落への包括的支援」を考えていただくことを要請・提言致します。

限界集落とは、小規模な集落が、少子高齢化と同時に過疎化し、労働力や生活の維持管理能力を失っていくことで、共同体としての機能が限界に達している状態の集落、もしくは将来その状態が予測される集落を意味しています。

## 3. 集落の伝統・生活文化の記録保存について

第2回講座では、地元の金刀比羅神社や山口茂吉の歌柱を探訪し、歴史的背景とともに、感謝や癒しの空間となった神社、こよなく愛されたふるさとの姿を新たな思いで、見つめ直すことができました。

多可町人口ビジョンの「人口減少、少子高齢化が、まち、ひと、しごとに及ぼす危機シナリオ」では、“地域文化（伝統文化、生活習慣など）の継承のしくみ、喪失の危機”を指摘しています。小規模集落の共同体の崩壊は、同時に地域に営々と根付いた生活文化の喪失につながっていきます。

人が生き抜くために、時に楽しみ、悩み、工夫し、その過程で創造してきたものが文化であり、まさに、各集落には、伝統的祭事、芸能、伝承から言語に至るまで、様々な価値ある「ふるさとの生活文化」が現存しています。

たかテレビのニュースソース的な映像記録だけではなく、集落の歴史・文化財・伝承・伝統文化を取りまとめ、記録保存し、生活文化遺産としてまとめていく作業を急ぐべき時期と考えます。（例えば「〇〇村風土記」づくり）そのための収集法、記録法、保存法等の必要に応じた研修の開催、そして助成制度も合わせて検討して頂くことを提言致します。

## 2.【地域の居場所づくり】多可カフェ（ユニバーサルカフェ）をみんなで 作りませんか

皆さんは、自治会で行われるふれあいいいききサロンや絆カフェなど参加されることはありますか？中には、行きたいけれど自分の住む地区ではふれあいいいききサロンが行われていない。絆カフェとは、縁がないという方もいらっしゃるかもしれません。

ふれあいいいききサロンとは・・・

地域の方が中心になり公民館や近くの集会所を利用し、茶話会やレクリエーションを通して誰もが気軽に集える場所をつくり、地域での孤立や引きこもりを防ぎ、世代を越えたふれあいの中で仲間づくりを行うことを目的とされています。

絆カフェとは・・・

住み慣れた地域で、自分らしく暮らし続ける事が出来る社会を目指し、認知症の方や介護をしている方、また地域住民、専門職が集まって語り合う場所のことです。八千代区では絆カフェ喜楽・中区ではささゆり絆カフェ・加美区では絆カフェ千ヶ峰・絆カフェフラワーがあります。

現、創造大学講座生の皆さんは50代～80代と異なる世代の方々が参加されていることで幅広い年齢層のふれあいの場となっています。講座生の皆さんの顔を見てみると、終始笑顔でいきいきと楽しんでいらっしゃるなど感じています。新しい方やベテランの方、地区や年齢の垣根を越え交流することで生活に活力を見出すことが出来るのではないのでしょうか。

講座生の皆さんから1年を振り返り

\*いろいろな出会いがあり楽しかった。

\*心も身体もリフレッシュできた。

\*老いも若きも楽しいことは楽しいという実感ができた。

などの感想をいただきました。

そこで講座生の皆さんに提言いたします。

創造大学で学ぶ皆さんと私達運営委員で、高齢者・子育てを頑張っている親・子ども・障がいがある方・町内に住む外国の方・移住されてきた方と、異なる世代の方々誰も気軽に集える多可カフェ（ユニバーサルカフェ）を一緒につくりませんか。

講座生の皆さんの中から、スタッフとして参加していただける方を募集します。

多可カフェの特徴としては

\*町内の福祉施設で作られるお菓子を提供できればと思います。

\*笑いヨガや落語・絵本読み聞かせ・紙芝居・ミニコンサートなど行えればと思います。

\*趣味や特技を活かした物づくりができればと思います。

まずは、皆さんで体験していただき、地域へ発信していきます。

多可カフェ（ユニバーサルカフェ）をつくるにあたり 下記の提言を致します。

## 1. 多可カフェに伴う公共施設利用について

多可カフェは、3区地域の皆さんが参加しやすい環境にするために開催場所を一か所に決めず移動式が望ましいと考えます。

子育て支援センター・アスパル・図書館・コミュニティプラザ・地域集会所など公共施設を利用する許可の検討を提言致します。

## 2. 多可カフェ開催情報・発信について

地域にまたがり情報発信を行うために、上記にあげた公共施設や多可赤十字病院・役場等に多可カフェ開催案内を、たかTVや広報でお知らせの検討を提言致します。

## 3. 助成金制度について

活動するにあたり助成金補助等の検討をして戴くことを提言致します。